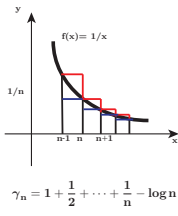


模擬講義Ⅰ (11:30~12:15)

認知情報学系
極限の不思議
清水 扇丈 教授
(数学解析・偏微分方程式)



紀元前5世紀にゼノンによって提示されたアキレウスと亀のパラドックスは、俊足のアキレウスがどれだけ早く走っても前を行く遅い亀に追いつくことができないという話ですが、これは公比が0と1の間である無限級数の極限の存在によって説明できます。S=1-1+1-1+...という級数は、S=(1-1)+(1-1)+...=0、S=1-(1-1)-(1-1)+...=1、S=1-(1-1+1-1+...)=1-SよりS=1/2と3種類の和があるように見えますが、収束の定義に基づくと1-1+1-1+...という級数は発散級数であり和を持たないことがわかります。このように極限を考えるとときは、収束を厳密に定義し、それに基づいて議論することが大切ですが、一緒にいくつかの極限の存在を探ってみましょう。

模擬講義Ⅱ (14:00~14:45)

人間科学系
災害ボランティアと
アクションリサーチ
永田 素彦 教授
(社会心理学)



日本はしばしば大災害に見舞われてきました。1995年の阪神・淡路大震災では、全国から多くの災害ボランティアが被災地に駆けつけ、「ボランティア元年」と呼ばれています。その後の多くの災害でも、災害ボランティアは無くしてはならない存在になっている一方で、さまざまな矛盾やジレンマも浮上しています。今回の模擬講義では、東日本大震災でのアクションリサーチをもとに、災害ボランティアの役割と課題を考えてみようと思います。

研究室公開

研究室（実験室）を訪れ、大学の研究室の雰囲気や先生方の研究の様子を感じとって下さい。※参加希望の研究室の集合場所を下欄で確認し、各クール開始時間15分前に集合してください。

総合館・3号館 人環棟

人間科学系
精神病理学・精神分析学

松本 卓也 准教授
人環棟3F 318



当研究室では、「精神病理学」と「精神分析」を中心に研究しています。この2つの分野は、精神医学とも関連がありますが、医学的・「理系」的な方法よりも、むしろ様々な哲学や思想などを参考にした“文系”的な方法によって精神障害を考えようとするものです。オープンキャンパスでは、研究のさわりの部分や、基本的な考え方をお話します。

人間科学系
美学・芸術学

武田 宙也 准教授
吉田南総合館南棟4F 共南479



専門は美学・芸術学です。これは一言でいえば、美や芸術について哲学的に考える学問です。美や芸術について考えるためには、たくさんの方の芸術作品に触れたことがあったり美術の歴史を知っているだけでは十分でなく（もちろんそれは、まずもって大切なことではありますが）、文理にまたがる幅広い素養が必要になります。美大ではなく総合大学である京都大学、さらには総合人間学部という、その中でもとりわけ学際色の強い学部で美学・芸術学に取り組む意義はここにあると、私は考えています。興味を持たれた方は研究室をのぞいてみてください。

人間科学系
英文学・イギリス小説

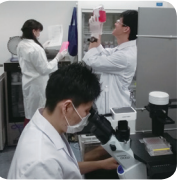
廣野 由美子 教授
吉田南総合館北棟4F 共北4130



私はイギリス小説を研究しています。主たる研究対象は、ジェイン・オースティン、プロンテ姉妹、ディケンズ、ジョージ・エリオット、トマス・ハーディなどの19世紀作家です。小説は「語り手」によって物語られています。この「語り」に着目して小説を分析することが、私の中心テーマです。また、プロット構成・人物造形・ミステリーなど様々な技法的側面からも、作品解釈を試みています。授業では、英語の原書を読解する鍛錬が、土台となります。

認知情報学系
運動医科学・健康科学

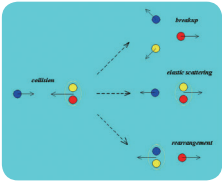
林 達也 教授
江川 達郎 助教
人環棟3F 310



「運動はどのようなメカニズムで健康を増進させるのか」「運動を十分に行えない人たちの代謝機能を向上させるためには」「運動をしないあるいは年を取ると筋肉が衰えるメカニズムは」というようなテーマで研究を進めています。最近では、食品成分のもつ運動類似作用や運動効果を高める作用についても研究しています。主に実験動物や培養細胞を対象に、生理学・生化学・分子生物学的手法を用いた研究を行っています。

認知情報学系
数学（解析学）

足立 匡義 教授
人環棟2F 226



私の専門は解析学で、主として量子力学の基礎方程式であるシュレーディンガー方程式を、関数解析学的手法を用いて研究しています。実際にその内容を紹介するとすれば、相応の予備知識が必要となります。しかし、この場合はオープンキャンパスですから、それがあつてを前提としてお話すつもりはありません。高校までで学ぶ内容から完全に乖離したものでなく、それを基礎として研究が進んでいるのだということを、少しでも理解して頂けるよう努めます。

認知情報学系
言語学、フランス語学
機能的言語類型論、言語相対性仮説

守田 貴弘 准教授
吉田南総合館南棟3F 共南335



「話している言語によって見える世界も変わってくる」。そう言われてみなさんは納得するでしょうか。それとも、「そんなわけない」と思うでしょうか。学問として一歩進むためには、「じゃあ、どうすればどちらが正しいのかを確かめることができるのだろう?」という問題を考えることから始まります。オープンキャンパスでは、この謎に迫るための言語学的実験の試みについて紹介します。その他にも、理論言語学や、フランス語学について知りたいといった方も大歓迎です。

国際文明学系
政治学・公共政策

佐野 亘 教授
人環棟3F 327



政治や公共政策に関する諸問題について、幅広く研究しています。わたし自身は主として理論的な研究をおこなっていますが、研究室全体としては、地方議会や空き家問題のような具体的な政治・政策の問題から、政策デザインや「エビデンスにもとづく政策」(evidence based policy) についての理論研究まで、いろいろなテーマを扱っています。わたし自身は現代規範理論と呼ばれる哲学的な議論と、具体的な政治や政策のあり方をどうやってつなげるか、ということを経験的なテーマとして研究してきました。



国際文明学系
ドイツ思想、比較文学

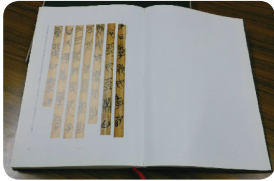
細見 和之 教授
吉田南総合館南棟 共南411



私の専門はドイツのユダヤ系思想です。固有名詞でいうと、アドルノ、ベンヤミン、アーレント……。いずれも、ヒトラーの時代には亡命せざるをえなかったひとたちです。彼ら、彼女らの思想を考えるうえでは、ホロコーストなどの背景を確認する必要があります。時代のなかでそれぞれの思想をトータルに捉えること。また、私自身若い頃から詩を書いてきたこともあって、現代詩を中心とした比較文学もたいせつなテーマにしています。

国際文明学系
古代中国語

松江 崇 准教授
吉田南総合館南棟3F 共南325



専門は古代中国語——おおよそ皆さんご存知の「漢文」に相当します——です。かつては「文法がない」と言われたこの言語には、実際には、時代ごとに精緻で複雑な文法規則が存在することが分かってきました。それらを明らかにしつつ、古代中国語の発音を推定していくことによって、例えば曹操や諸葛孔明といった『三国志』の登場人物たちがどのような言葉を話していたのか、といった謎に迫ることができるのです。

文化環境学系
フランス文学

塩塚 秀一郎 教授
吉田南総合館南棟4F 共南432



専門はフランス文学。実験的な趣向や仕掛けをもつ作品を好んで読んできた。たとえば、Eの文字を一文字も使わずに書かれた長編小説。なぜわざわざそんな面倒くさいことをするのか？ 言語に〈傷〉を負わせることで表現力が増すのだろうか（逆だろうという気がするが……）。あるいは、パーキングエリアで寝泊まりしつつ高速道路を出ないで過ごした一か月の記録。〈速く〉走るべき高速道路を〈ゆっくり〉走ったら見える風景はどう変わるのだろうか？ そんなことを考えるのが面白くてしかたがない。

文化環境学系
人文地理学

小方 登 教授
人環棟4F 437



地域空間論分野では、人文地理学をベースとした研究・教育を行っています。地球上では異なる環境のもとで、人々が多様な生活様式を展開させていますが、当分野ではこうした地域的多様性を扱います。研究を行う上でフィールドワークなどが重要になりますが、他方で地図をはじめとする地理情報の活用も重視しています。近年では紙の地図に代わりコンピュータ・スマホ上で地形をはじめとする地理情報が広く使われるようになりました。研究室公開ではこのようなデジタル地理情報処理・表示の原理について紹介します。

文化環境学系
環境構成論・文化遺産の保全

増井 正哉 教授
人環棟4F 421

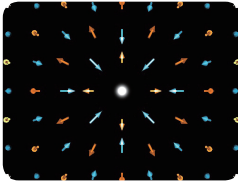


皆さんが住む町・村にはそれぞれに固有の歴史・文化があり、それらとどのように保全し活用していくかが、町・村の再生の鍵として注目されています。ただ、再生・活用をはかるなかで、大切な歴史・文化が失われてしまう例もよく目にします。私たちは国内外の具体的な町・村を対象に、歴史的建造物・町並み景観・史跡や名勝の保存整備計画づくりや保存管理の仕組みづくりをお手伝いするなかで、歴史・文化を読み解く手法、それを保全・再生に結びつけていく手法、さらにはそれを持続的に可能にしていく社会的な仕組みづくりの研究を行っています。



自然科学系
物性理論

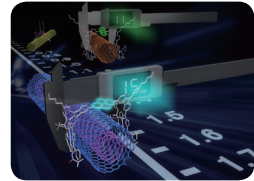
森成 隆夫 准教授
吉田南2号館3F 325



ブラックホールの性質を実験室で調べる？ そんなことが可能でしょうか？ 実はブラックホールの物理と流体の物理は対応することが知られています。この対応関係を使うと、ホーキングがブラックホールについて予言した現象を確かめることができるのです。研究室公開ではこの現象の数値シミュレーション結果や超伝導研究についてご紹介します。

自然科学系
ナノサイエンス

小松 直樹 教授
人環棟3F 315



我々の研究室では、フラーレン、カーボンナノチューブ、グラフェン、ナノダイヤモンドなどの炭素のみからなるナノ材料（ナノカーボン）の研究を行っています。これらの材料は、非常にユニークな光学物性（色々な光に応答する性質）を有しています。今回の研究室紹介では、ナノカーボンなどの先端材料から日常で使う蛍光ペンやマーカーなどを題材にして、物質の光学物性について簡単な実験を通して考えてみたいと思います。

自然科学系
生態学

加藤 眞 教授
吉田南2号館3F 312b



守るべき自然とは？ 自然の価値とは？ 生物多様性の起源は？ そんな疑問に答えようと、さまざまな自然（森林生態系、海岸生態系など）の中で、多様な生物（植物や昆虫、貝などの海産無脊椎動物など）の種間関係や共生関係の自然史を研究しています。特に、花と訪花昆虫の間に見られる送粉共生系には、相利共生の進化や、共進化の動態、非協力的なパートナーへの制裁など、多くの興味深いテーマが秘められています。

自然科学系
地球科学

鎌田 浩毅 教授
吉田南2号館1F 2共106



火山を明らかにする研究をしています。特に、噴火が地球環境を変化させた仕組みに関心をもっています。応用面としては、地学の手法で噴火災害を予測し、軽減する研究をしています。この写真は伊豆大島1986年噴火ですが、私は火山弾に追いかけられました（『地学ノススメ』ブルーボックス）。最近では、火山学と地球科学の啓発・教育活動にたずさわり、科学を分かりやすく解説する「科学の伝道師」をしています。